No.37
2008. 12. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

●クメールシルクがつなぐ心と心……1
●ネパールマンガルタール現地調査報告……2
●タクレ集落　働きものの女性たち……3
●村の人たちを喜ばせた写真……4
●ネパール極西部からラムラム！……5
●日韓地球市民教育交流 in ソウル……6
●ネパール・デイ2008……6
●「六ヶ所村ラプソディ」上映会＆トークを終えて……7
●活動日誌……7
●INFORMATION……8

クメールシルクがつなぐ心と心

2006年、初めてカンボジアへ現地調査に行ってから、3年目を迎えた。現地で困難な状況で暮らす少女たちに織物と裁縫を教える職業訓練センターへの支援である。地球の木会員の多くを占める女性に、支援をもっと身近に感じてもらえるプロジェクトになればと思っていたが、クメールシルクの「手織り・手作り」は、私たちが失いかけている何かを思い起こさせてくれ、日本とカンボジアの人たちの心をつないでいる。

現在、センターで作ったシルク小物は、同じセンターで作られたシルクの手織りスカーフと共に地球の木事務所だけでなく、国際協力のお祭りや、地域のお店などで販売している。どこに行っても女性たちの関心は非常に高く、熱心に話を聞いてくれる人が多い。「手織り」そして、「絣」の作業のこと、カンボジアの少女たちの状況を話すと、「よくわかりました。大切に使います……」と言って買ってくれたりする。

地球の木オリジナルシルク小物は、注文生産を始めてまだ1年足らず。品質に関して、かなり改善はされたが、まだ日本の消費者を完全に満足させるような出来上がりとはいえない。「布に織り傷のある部分は使わないで」と注意してもバッグの両面の柄が少しちがっていても「もったいない」と言ったりする。そんな話をある会員にしたところ「そうですか……でも私はカンボジアの人たちのそんな『もったいない』という気持ちを大切に思いたいので、こちらを頂きます」とあえて両面の柄の少し違ったバッグを選んで買ってくださった。「売れる商品」を作りたい、現地の人たちにもっとビジネス感覚を持ってもらいたい、ということばかりに気が向いている私たちに、この会員は、忘れてはならない大切なことを思い出させてくれた。自分たちの考えを一方的に現地に押し付けているのではないか……現地から学ぶことも多くあるのだ。また、ある織物工房を主宰している人がこの職業訓練センターの話を聞いて、地球の木の会員になり、クメールシルクチームに入ってくれた。

訓練センターで、布や小物を見ながら話し合う筆者と少女たち

和装小物も作っている彼女はセンターで織った「絣」の布で、懐紙入れや帯などを作ってくれた。今年の7月、その帯を締めた着物姿の写真をカンボジアへ持っていった。現地で写真を見せると少女たちの顔がぱっと輝いた。自分たちの織った布が日本の人たちの手によって様々なものに変わっていく、それはカンボジアの少女たちにとって嬉しい驚きであり、同時に日本の人たちが、自分たちの作ったものを評価しているという証でもある。そしてそれは、彼女たちの「自信」や「やる気」へとつながっていく。

センターの少女たちの家庭環境は、両親が亡くなっていたり、片方の親が病気や障害があるなど厳しい。弟妹がたくさんいる子も多く、半数以上の子たちが小学校を2～3年生でやめている。今までで一番楽しかったことは、「学校に通っているときに一度行った遠足」だという。このセンターで作ったスカーフや小物を売ったお金の一部は彼女たちの収入になる。家族へ渡す子が多いが、貯めている子もいる。貯まったお金はセンター卒業時に自立するための資金となる。11月末には、先述の会員になってくださった織物専門家の人々と一緒に現地を訪問し、新しい製品の注文などをおこなう。また新しいシルク小物が出来上がるのが楽しみだ。

（クメールシルクチーム　筒井由紀子）

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

図書室の落成式に集まった村びとたち

ネパール マンガルタール村現地調査報告

9月14日～21日

地球の木は、ネパールNGO、SAGUNと共に「幸せ分かち合いムーブメント」と名づけた教育支援を始めている。これをネパール語では「クシィ・アダン・プラダン・アヴィヤン（幸せをあげたりもらったりする運動）」と呼んでいる。参加型の手法を使う開発プロジェクトは今や珍しくないが、手法に留まらず、支援者が村人と様々な交流をしながら「幸せを分かち合う」ことを大切にした試みである。この運動が村の若者たちに希望を与えている様子を見ることができた。連邦民主共和国となったネパールに赴き、活動開始から1年半経ったマンガルタール村を訪ねた。

奨学金制度　～若者たちを推進力に～

ネパールでは、本来の高校は10年生まで。大学に入るまでの11・12年生を「テンプラス2」と呼ぶ。地球の木が支援するのはこの学生たちだ。SLC（高校修了認定国家試験）の結果が出ていないため、新11年生はまだ登録されていなかった。12年生は引き続き学んでいた。今年度からマンガルタール村以外の村から来ている生徒への奨学生枠を追加し、地域の住民から歓迎されている。というのも、この高校は、近隣10村で唯一の高校であり遠くから通ってくる生徒こそ厳しい状況にあるからだ。

昨年度、トレーニングを受けた後、村の状況調査を行った生徒たちは、その後も機会あるごとに調査やワークショップなどの助手や進行役として役割を担っていることがわかった。その際に少額の報酬を得ることもある。南アジアの水資源管理技術者のトレーニングをSAGUNが請け負い、フィールドワークをマンガルタール村で行った。その時、若い女子学生たちが自信を持って進行するのを見て、参加者は感銘を受けたようだ。

「幸せ分ち合いムーブメント」は、他のプロジェクトとどう違うのか、と若者たちに尋ねてみた。「直接参加できる」、「多くの人と交流し、意見交換ができる」、「一緒に歩いて交流できる」と笑顔で答えてくれた。

図書室

3階建ての校舎の屋上に建てられた図書室が完成し、盛大な落成式が行われた。図書はまだ少ないが、主にテンプラス2の教科書が備えられている。毎朝2時間、図書室を開けている。図書委員会も作る予定だ。教育コースに加え、ビジネスマネージメントコースが新設された。商業担当の新しい教師ジットさんが図書室の担当となり、空き時間に図書室の利用法や本の紹介を特別授業として行いたいと意欲的である。

公立学校への期待と課題

図書室の落成式には、村の熱烈な要請により、一時帰国中のガネッシュ駐日ネパール大使も参加した。大使はSAGUN前代表であり、*タマン族でもある。スピーチの中で教育の質に焦点を当てることが大切で、マンガルタールの高校がモデル校となり、他の地域へ波及させることを提案した。

この地域から選出されたマオイスト（共産党毛派）の制憲議会議員も招かれていた。「王制を倒すことに成功はしたが、封建的な社会はすぐには変わらない。政治上でも底辺に追いやられている人たちは認められていない」と発言。公立学校については、「先生が自分の教えていることに自信がなく、自分の子どもは私立に通わせているところにこそ問題はある」と述べた。

＊マンガルタール村には少数民族であるタマン族が多く暮らす。

貧困家庭への収入創出プログラム

MSCC（マンガルタールSAGUN協力委員会）により、収入創出プログラムを受ける10家庭を選出中である。当初は、農業トレーニングを計画していたが、貧困層には、土地を持たない者もいる。また、山の中腹に集落が散らばっていることもあり、トレーニングに参加するにも、グループづくりをするにも困難なことがわかった。現在委員会と調整中である。

村の女性たちとの交流

女性たちはまだ暗い内から夜までずっと働いている。やっと仕事が一区切りつく午後3時頃、小学校の前に集まってもらい、交流を行った。タマン族の女性は明るくたくましい。鼻の下に「ブラキ」というピアスをしている。「お父ちゃんが、私たちが逃げないように家につなぐためよ！」と冗談を言ってゲラゲラ笑う。

おかあさんグループの活動や子育ての話を聞いた後、「マジカルバナナ」のカードゲームを紹介した。大農園で作られるバナナと山に育つ自然のバナナのことを16枚のカードにして、読み上げて分けるゲームだ。バナナがずらっと並ぶ大農園の写真を見てびっくり。村の人たちは、農薬の身体への影響を再確認し、自分たちの庭に育つバナナに自信を持ってくれたようだ。

（ネパールチーム　丸谷士都子）

タクレ集落の暮らし

働き者の女性たち

子どもたちは山道を2時間かけて通学している

今回訪れたタクレ集落は、高校のある麓から2時間ほど急勾配の山道を登ったところにあります。山並みをつなぐ細い山道を歩けば、見事な段々畑、石壁の家々、森の木々、草花、湧水など豊かな自然が広がります。この地区でも2年前、村の努力により超小型水力発電が導入され、村人による維持管理が機能しており、日が暮れると家々には小さな明かりが灯ります。この灯りのもとで、家事や作業をしたり、子どもは宿題をやったりしています。庭先にトイレがあり、助かりましたし、トイレにも灯りがあって有り難かったです。（ネパールでは都市部でさえも何時間もの計画停電が日常的にあり、キャンドルナイトとなるのです）

山肌にはりつくような、畑や集落での、厳しい自然条件の中でのタマン族の人々の暮らしも、少しずつ変わってきているようです。各家庭への計画配水（水が使える時間が決まっています）や、水力発電の導入には村人が結束して実現を果たし、暮らしを便利にしました。このいきさつを、水プロジェクト委員会の代表者カンチャカジさんから、詳しくお話ししていただきましたが、女性を含めた委員会が中心になり、話し合いで物事が決められていきます。生活の中心は農業ですので、牛やヤギなどの家畜に与える草の刈り取りや、畑仕事、収穫された主食のとうもろこしの保存などの農作業を朝から晩まで行っています。

トウモロコシと子どもたち

料理中のお母さん

カンチャカジさんは、炒り豆を皆にふるまってくれた

畑には、カボチャ、ジャガイモ、きゅうり、豆などが栽培されていて、バナナやナシ、グアバなどもありました。台所は、土間に火をおこして、土間に直接腰をおろして料理をします。焚き付けには、トウモロコシの芯を使っていました。家庭に水場ができるまでは、泉に水汲みに行っていましたが、現在は定刻になると水が出るので、洗い物をしたり,料理用の水を汲み置きしたり、家畜用には専用のタンクに汲み置きしていました。ホームステイ先の家庭では、主(42歳)が2年の予定で中東へ出稼ぎに行っています。笑顔の本当に素敵なご家庭でしたが、4人の子どもは全員学校に通っており、農作業、子育ては、お母さんの、とても痩せた肩にかかっていました。朝4時から夜9時過ぎまで、体を動かして働いている姿は、生活そのものが修練であるとさえ感じました。

以前はテンプラス2(11・12年生)の教育課程を受けるためには、都市部に行かなければならなかったのですが、村に高校ができたので、希望する女子学生も村を離れずに勉強を続けられる機会が増えました。奨学生の一人は、学校の先生になる夢を語ってくれましたし、すでにその夢をかなえた生徒もいます。カトマンズでビジネスの勉強をしたい、日本へ行きたい、という青年もいました。

このプロジェクトではPRA(参加型農村調査法)という手法が取り入れられており、実際に村の高校生が、村の現状調査を行いました。今年度の調査をもとに、村の人たちと中期5ヵ年計画が立てられます。よりよい暮らしのために、開発や発展を望むとすれば、その内容を決めるのは村人です。そのために必要な「自分たちの文化に誇りを持ち続け、真の幸せのための正しい選択をする力」を身につけるための教育が望まれますが、これは、ここ日本でも必要とされているような気がします。

村のふもとではヘルスポスト(簡易診療所）の建設が進んでいます。以前は、薬草など伝統的な病気の治療法がありましたが、今は薬を買っているそうです。子どもの病気で多いのは、夏は下痢、冬は気管支炎や肺炎です。女性グループは貯蓄をして村の清掃や衛生活動に充てているそうです。贅肉のない村の女性たちが、とてもよくしゃべっていたのが印象的でした。

（ネパールチーム　岸　夏代）

from Laos

村の人たちを喜ばせた写真
15年の支援に感謝して

移転した村の跡地にできた湖

2008年9月、15年続いたJVCの、カムアン県における活動の幕が閉じられた。地球の木には1993年の事業開始から終了まで、長い間活動への支援を賜った。振り返ってみると、その間で最も印象深いのは、やはりナカイヌア村との関わりだろう。

カムアン県のナカイヌア村は、世界銀行が支援するナムトゥンⅡダムの開発の影響を受けることになった村だ。地球の木はこの村にダム建設の話が持ち上がった当初から関わり、そして移転の直前、2007年12月にも現地を訪れている。その時の村人との交流会は印象深い。最初は表情も硬く、移転に対して「嬉しい、新しい生活に期待している」といった、通り一遍の感想しか出てこなかった村人も、地球の木の人たちからの質問や、日本の暮らしを紹介しながらの交流を通じ、少しずつ表情が和らいでいった。特に、村の様子を写真に収めるという企画では、これまで口をつぐんでいた村人全てが活発になり、自分の家や竹の子が取れる林、また、毎日水浴びをする川や大きな実を付けるマンゴーの木など、思い思いの場所をあちこち周り、村人の足に追いつくのが大変であったほどだ。村にはもちろんカメラなどなく、記憶の中に留める以外、自分達の村の面影を保存する手段がない。地球の木のこの企画には、多くの村人が喜び、写真の到着を心待ちにしていた。

そして今年8月、地球の木から届いた村のアルバムと写真を手に再度、村を訪れた。村は既に移転しており、村があった場所は大きな湖となっていた。「私のおばあさんの家だわ」「この川、懐かしい」「よくこの木に登ったね」など、写真を見ながら、集まった村人たちは口々に思い出を語り合い、100枚程あったスナップ写真は15分程度で全てなくなった。移転して4ヵ月、村人は新しい暮らしに少しずつ慣れたように見えるが、それでも新しい土地は砂地で農業には向いておらず、またダム会社からの米支援が9月で終わるなど村人の不安は依然多いという。

「写真を届けてくれてありがとう。村人たちが、JVCの活動を自分たちのものだと気づき、一緒にやってこられてよかったと思う」別れの間際に森林ボランティアのバンチョン氏はそう述べた。この15年間、地球の木は何度となく日本からナカイヌア村を訪れ、時に村人の話に真剣に耳を傾け、時に遠い日本の様子を伝えるなど、村人との交流を図ってきた。それは、多くの対象村を抱え時間に追われながら活動しているJVCだけでは難しいことであり、地球の木の方々がラオスやナカイヌア村の人たちを真剣に思う気持ちが「村人の参加を感じた」という最後の感想につながったのだと思う。

JVCはカムアン県での活動を終え、サワナケート県に10月より拠点を移した。サワナケートはカムアン以上に、経済開発が進んでおり、村人の生活への影響も大きい。また日本政府が建設を支援したタイとの友好橋や国道もあり、日本との関わりも深い。地球の木のこれまでの長い支援に感謝を示すと共に、新天地サワナケート県においてもJVCと共に村人をサポートしてくれる事を強く願っている。

（JVC ラオス現地代表　新井　綾香）

写真を喜ぶナカイヌア村の人々

ラオス　森林保全・自然農業支援

from Nepal

ネパールSOARS現地調査
極西部からラムラム！

刈り取ったばかりの稲わらの前で紙芝居をする

デブラニと娘のサラダちゃん

両手を合わせて「ラムラム」と挨拶すると、色とりどりのサリーで飾った村の入口のウエルカム・ゲートに集まった人々の表情が崩れ、笑顔が広がる。ここ、カイラリ郡の村では、「ラムラム」が挨拶の言葉だ。地球の木とSOARSが1997年から始めた、最も貧しい人々のための支援の成果を調査に来て、びっくり！12年前、初めて訪問した時には読み書きのできる女性がほとんどいなかった村々で、「うちの娘はテンプラス2の11年生です」「うちの娘は大学に行っています」と誇らしげに語る親たちに大勢出会う。

いくつの女性グループを訪ねたであろうか……。識字教室で貯蓄の大切さを学んだ女性たちは、貯蓄グループを作って、月に20ルピー（36円）を集める。集めたファンドの中から低利で「ローン」を借りて必要なものを買う。主な使い道はランプ用の灯油、病人が出た時の薬、教育費だと言う。子豚を買い育てて売る女性、野菜作りのための土地を購入した女性もいる。裁縫教室の卒業生アサは、店をもって仕立て屋を経営している。2003年の調査の時には1人だった仕立て屋が、4人に増えている。私が「すごい！」を連発するので、同行したニルマラさんも「ス、ゴ、イ？」とからかうような目つきで聞く。

識字教室の生徒から先生になった、女性たちの憧れ、デブラニの村も訪れる。デブラニを教えたラクシュミの家に今回は泊めてもらう。地域のリーダーとして多くの期待を集めているラクシュミは、トイレ作り、井戸作り、女性グループの指導などに奔走している。「デブラニの成功例を元に作った紙芝居『デブラニ物語』を日本から持ってきた」と言うと、皆が「早く見たい！」と言う。朝まで待ちきれず、ラクシュミの家でやるということになる。真っ暗な居間にラクシュミの家族、デブラニの妹たち、従妹たちが次々と集まる。物語に登場するデブラニのお母さんも一番後ろに座っている。

横浜インターナショナルスクールの生徒たちの協力で英訳した「デブラニ物語」を英語で読み、ニルマラさんがネパール語に訳す。闇の中から興奮したような声が聞こえる。ネパール語はおろかタルー族の言葉を知らない「非識字者」の私には何を言っているのか分からない。紙芝居が終わり、感想を聞くと、「この紙芝居は本当にあったことだわ！」「絵もデブラニにそっくり！」など、デブラニの妹たちが口々に言う。「お母さん、どうでしたか？」と恐る恐る訊ねると、「とても嬉しい」と言葉少なに答える。

妹たちもデブラニの生徒だったこと、上の妹はテンプラス2に通いながら識字教室で教えていること、下の妹は大学生であることなどが判明する。翌朝、デブラニの教え子２人が会いに来てくれた。「デブラニ先生は、いつも、将来を見つめて、より高い教育を受けなさい、そして、先生になって、この国を良い国にしなさい、と言っていました」という言葉を聞いた時、SOARSという名前のSの字に表されている「サステイナブル・ディベロップメント」（持続可能な開発）という考えが、確実に地域に広がっていることを知った。

（ネパールチーム　乳井　京子）

裁縫トレーニングの卒業生の店で（左端はニルマラさん）

ネパール　教育支援

日韓地球市民教育交流 in ソウル

（10月30日～11月2日）

たくさんの人々が行き交う街角の路上では、よく熟れた柿やミカンが山盛りになって売られていた。木々も色づき、秋も深まろうとしていたソウル。そこソウルで今回4回目となる「日韓地球市民教育（開発教育）交流」が行われた。私たちを出迎えてくれたのは、「地球村の人々（Window to the World）」という主婦のグループ（メンバーは16名）。多くが前回の2年前、横浜で会った懐かしい顔ぶれである。彼女たちは今年春、韓国NGO「地球村分かち合い運動」から独立。自分たちでビルの掃除などをして事務所の経費を生み出し、元気に活動を続けている。

「私たちは、開発教育というウィルスにかかっています。ここに集まった人々が同じウィルスの中毒者となり、さらに多くの人々にこのウィルスを伝染させていきましょう」という代表のキムウニさんの挨拶で2日間のワークショップが始まった。

事務所で「100人村のキット」を見せてもらう

日本からの参加者は、地球の木とDEAR（開発教育協会）から3名ずつ、そして通訳の寺西さん。まずDEAR前代表の田中治彦先生が「日本の開発教育の現況について」との題で、開発教育の40年近い歴史から現在の状況までを解説。そのあと、韓国側から「韓国の現況」について、「まだ歴史は浅いけれど、今回のような機会を力にして開発教育を広めて行きたい」と率直な発表があった。両国とも「開発教育の課題」は、「人がいない お金がない」と悩みは共通である。

「地球村の人々」が行っているワークショップ「世界がもし100人の村だったら」の中学校での授業現場のビデオを見せてもらい、感想や助言を求められた。「100人村」を制作したDEARはこの教材が大変うまく活用されていることに感激していた。

また、DEARがワークショップ「ケータイの一生」を行い、携帯電話に使われている希少金属の存在と出所にみな驚いた。さらに携帯のリサイクルが韓国ではさかんに行われていることに私たちは目を見張らされた。

地球の木は、丸谷理事長が「ネパール幸せ分かち合いムーブメント」をいろいろな手法を交えながら紹介した。支援地の地域住民の「参加」に重点をおいた開発支援。その参加型支援の大切さは十分に韓国の人たちにも伝わったようだ。

その他にも韓国側からいくつかの発表があったが、4年間の交流の成果を十分にみることができた。そして今回も互いに刺激を受け合う充実した交流プログラムであった。

夜は、チマチョゴリ（韓国服）のファッションショーを見に連れて行ってもらったり、食事や散歩など3日間にわたって、韓国の人たちと楽しい時間を持つことができた。

いろいろ似ているところも多いが、違いも大きい隣国の人々と交流し、互いの文化や社会を知ること、これも大切な開発教育の一歩であると気付かされた。この「日韓交流」は、これからも収穫の多いものになるに違いない。

（広報チーム　沼田由美子）

ネパール・デイ2008

JR本郷台の駅からほど近い、地球市民かながわプラザ。ここで、“ネパール・デイ”という催しが毎年行われており、今年は10月19日(日)、地球の木は初めて共催団体として参加しました。フェアトレードをテーマにした映画「おいしいコーヒーの真実」上映や、セミナー、コンサートなど、多様な企画で、開催されました。

地球の木ではネパールでのプロジェクト、スタディツアーの紹介をパネルに掲示し、フロアでデプラニ物語の紙芝居を中心にワークショップを4回行いました。この日は国際協力という括りではなく、ネパールという国に興味を持つ人々が多く来場しました。ネパールの気候、風土、文化などにふれ、地球の木の活動に関心を寄せてくれる人もいました。

ネパールの“教育支援プロジェクト”と“幸せ分かち合いムーブメント”の二つのプロジェクトを同時に紹介する場を持つことができたのは、新たな試みだったと思います。

地球の木連続講座2008
「映画を見て語り合おう　エネルギーのこと　作ってみよう　ソーラーパネル!!」

第1回「六ヶ所村ラプソディ」上映会&トークを終えて

9月27日（土）に31名ほどの参加者を集めて「六ヶ所村ラプソディ」上映会&トークが開催された。昨年の田中優氏の温暖化についての講演会で示されたエネルギー問題を今年のテーマとしてとりあげようと、まずこの映画を見ることから始めた。映画は原発の使用済み核燃料再処理工場がある青森県の六ヶ所村に暮らす人々の思いを淡々と描いたドキュメンタリーだ。しかし画面に登場する一人ひとりの言葉は、反対派にしろ、肯定派にしろ、見る者に突き刺さる。

大都市の便利な生活の結果として排出する危険な核のゴミ処理を、遠く離れた六ヶ所村に押し付けているとい後ろめたさが私たちにはある。日常的な環境汚染はもとより、いったん事が起こるとどんなに恐ろしいものなのか。それをクリーンだ、日本の技術をもってすれば安全だなんて……私たちも極楽トンボだった。国の原発推進委員の大先生だって、「安全なんていえる訳ない。ただわれわれを信頼してくれと頼んでいるだけ……」だなんて。国策って、「国民に知らせないまま」「国民は無関心なら、知らないまま」進められるのか。六ヶ所村の漁師のおカミさんが言っていた。「20数年前、地元では激しい反対運動がおきた。そのときもっと県外の人が協力してくれたら……」

チェルノブイリの話をする牧野さん

トークでは、「知ることが大切」「私たちの今の生活は六ヶ所村の苦労の上にある。無関心ではいけないと思った」「原発は賛成か反対しかない。中立はないという言葉にズシンときた」などの意見が出た。

地球の木の会員でもあり、チェルノブイリの子どもたちを日本に保養に呼ぶ活動をずっとしてきた牧野美登里さんからは、いったん事故が起きるとどれほど広範囲に、しかも何世代にも渡って被害が続くのかなどについて聞いた。

地球の木が紹介したのは、国の経済発展を優先した巨大ダム開発のために移転させられたラオスの村の事例と、小規模水力発電やその村にある自然エネルギーを使った地域づくりが始まったネパールの事例。どちらからも六ヶ所村と同じ構造が見えてくる。

第2回目は11月16日(日)に自然エネルギーの代表選手、太陽光発電の電池（ソーラーパネル）を実際に私たちで制作。太陽電池を作ることできっと見えてくることがあるはずだ。また、この日製作したパネルは、地球の木が買い取り、支援地で活用する予定である。

（地球市民チーム　中野真理子）

活動日誌（9月～11月抜粋）

9月　1日　代表者会議
　　4日　マジカルシュガー教材作成ミーティング
　　6日　地球の木サロン「アロマテラピー」
　　9日　第3回理事会
　　13日　地球の木サロン「エッセイ修行」
　　14~21日　ネパール・マンガルタール村現地調査
　　16日　第4回ブランチ連絡会
　　17日　地球の木サロン「実践英会話」
　　18日　マジカルシュガー教材作成ミーティング
　　21~23日　磯子まつり（なんぶブランチ出店）
　　24日　地球の木サロン「実践英会話」
　　25日　地球の木カフェ
　　27日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
　　28日　平塚センターまつり（西湘ブランチ出店）
10月
　　4・5日　グローバルフェスタJAPAN2008参加（日比谷公園）
　　6日　翻訳チームミーティング
　　7日　3ヵ年ミーティング（横浜市技能文化会館）
　　8日　地球の木サロン「実践英会話」
　　12日　緑多文化フェスティバル参加（ラオスチーム）
　　15日　第4回理事会
　　18日　小田原センターまつり（西湘ブランチ出店）
　　地球の木サロン「エッセイ修行」
　　19日　ネパール・デイ（あーすプラザ/ネパールチーム）
　　21日　第5回ブランチ連絡会
　　22日　中間監査　地球の木サロン「実践英会話」
　　23日　ネパール報告会（平塚/西湘ブランチ）
　　JVCラオス新支援地紹介（事務所）
　　25・26日　横浜国際フェスティバル（パシフィコ横浜）
　　29日　マジカルシュガーワークショップ（K-DEC）
　　30日　WE講座「マンガルタール調査報告」（WEみなみ）
　　30~11/2日　日韓地球市民交流（韓国）
11月1日　地球の木サロン「アロマテラピー」
　　2~13日　ネパールSOARS現地調査
　　4日　ミャンマー報告会（地球市民ACT）
　　6日　翻訳チームミーティング
　　12日　地球の木サロン「実践英会話」
　　15日　地球の木サロン「エッセイ修行」「ハングルに親しむ」
　　16日　連続講座「あなたにも作れる!!ソーラーパネル」
　　（男女共同参画センター/地球市民チーム）
　　17日　第5回理事会
　　18日　第6回ブランチ連絡会
　　19日　地球の木サロン「Tea&Talk」
　　26日　地球の木サロン「実践英会話」
　　26~12/2日　カンボジア現地調査

INFORMATION

★地球の木のプロジェクトはあなたの会費で支えられています

好評発売中！ 地球の木カレンダー2009「風のささやき」

日常の隙間にきらりと光る宝石のような瞬間、
なんでもない日常に、どこか光を与えてくれるような小さな風景。
「風のささやき」はそんな風景の瞬間のコレクション。
年末年始のご挨拶に、クリスマスの贈り物に
ぜひご利用ください。
お申込みは、メール、電話、FAXにて事務局まで
★写真：白川由紀　★サイズ：56cm×38.5cm（使用時）
★価格：1,500円　★制作元：JVC

オープンOFFICE 地球の木カフェ クリスマスフェア

2008年も残すところ、後、わずかとなりました。
プレゼントの準備はお済みですか？
地球の木のアジアのグッズはいかがでしょうか？
手織りのシルクスカーフや手刺繍のポーチ……
ハンディクラフトで温もりを伝えませんか？

日　時：12月19日(金) 11：00～18：00
場　所：地球の木事務所
同時開催：カンボジア現地訪問報告会　14：00～
1ページで紹介したカンボジア・タケオの職業訓練センター訪問のホットな報告です。
（カンボジア里親支援報告もあります）

ネパールSOARS現地報告会

5ページでも紹介したネパールSOARSチームが素晴らしい12年の成果を見届けて現地調査から戻りました。ネパール極西部、イマドール村での地球の木の支援でなし得たミラクルをご報告いたします。

1回目　日　時：12月6日(土) 14：00～16：00
場　所：コミュニティルーム「ここ」
ネパール調査ツアーのホットな話とハロハロパーティをやりながらフィリピンの文化をちょっぴり覗いてみませんか？
2回目　日　時：2009年1月10日(土)13：30～15：30
場　所：なか区民活動センター研修室1
（関内駅南口下車徒歩7分）

カンボジア現地訪問報告会

11月末に会員の織物、染色の専門家の方々と支援地の職業訓練センターを訪れました。
カンボジア職業訓練センター支援プロジェクトの状況、カンボジアの近況などを報告します。

1回目　日　時：12月19日(金) 14：00～
場　所：地球の木事務所
2回目　日　時：2009年1月23日(金) 10：30～12：30
場　所：サポートセンターR705
（横浜駅西口・きた西口下車徒歩5分）
問合せ・申込：地球の木事務局

年末募金のお願い

今年も一年、地球の木の活動や支援に対し、多くの方々から温かなたくさんの寄付・募金をいただき誠にありがとうございました。今回も年末募金を行います。引き続き皆様のご協力をお待ちしています。

＊詳細はちらしをご覧ください。

ネパールスタディツアー2009

タマン族の村を訪れ、住民主体の村づくりから学ぶ旅

■日　時：2009年3月14日(土)～3月22日(日)8泊9日
■訪問地：ネパール　カトマンズ、カブレ郡ドゥリケルおよびマンガルタール村
■参加費：23万円（航空運賃、宿泊費、現地交通費、食費、現地プログラム、コーディネート費が含まれます。燃油特別付加運賃、ビザ、カトマンズ空港税、海外旅行傷害保険、日本国内の交通費は含まれません）
■対　象：テーマに関心のある健康な方
■参加資格：地球の木会員（会員でない方は初年度会費3,000円でご入会いただけます）
■内　容：ネパールの状況や参加型の村の開発について学んだ後、先住民タマン族の村にホームステイ。村の人たちと村を歩き、文化を守りながら生活向上をめざす村人から学ぶツアーです。後半はカトマンズ市内巡りや、今年2月来日したスニタさん、ススマさんの所属するユースクラブの活動から学ぶ機会を持ちます。
■定　員：10名（先着順）最少催行人数：5名
■申込み締切：2009年2月6日(金)
■説明会：2008年12月21日(日)と2009年1月18日(日)
午前11：00～12：30　地球の木事務所にて
■旅行企画・実施：風の旅行社
東京都中野区新井2-30-4　I.F.Oビル6階
国土交通大臣登録旅行業1382号
■現地プログラム企画・特定非営利活動法人　地球の木
■企画への問い合わせ：地球の木 045-228-1575
chikyunoki@e-tree.jp
詳しい資料をお送りします。

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

PRINTED WITH SOY INK
環境に配慮した「大豆インキ」を使用しています